

相互行為としてのメディア翻訳 —ドキュメンタリー番組の言説分析—

坪井睦子

(立教大学大学院・異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

*This paper draws on the communication model of linguistic anthropology to explore the interactions in which media discourse and translation function and where journalists as well as translators participate as active agents. Based on discourse analysis on BBC documentary series *The Death of Yugoslavia* translated into Japanese by NHK, it shows that documentary translation as one of the significant media translation practices occurs in the socio-cultural and historical context and is created through the active processes of contextualization and textualization. It points out the importance of the role of media translation in this globalizing world and its further directions.*

1. はじめに

1989年ベルリンの壁崩壊に伴う冷戦構造の終焉、続く東欧民主化、ヨーロッパ再編という潮流の中で、グローバル化が急速に進展し今日に至っている。このようなグローバル化の過程で、翻訳を介したコミュニケーションも拡大、多様化し、異文化コミュニケーションに果たす翻訳の役割は一層重要となっている。翻訳に関わる様々なジャンルの中でも、新聞、雑誌、テレビ等メディアを通し我々が日々接する国際報道記事やニュース、ドキュメンタリー番組は、とりわけ日本から地政学的に遠い国々の出来事理解に大きく貢献している。しかし、多くの場合、視聴者や読者は国際報道における翻訳の存在や影響を十分認識しているとは言いがたい。その背景には、現代社会における一般的なコミュニケーション観、即ち「コミュニケーションとは情報伝達」であるというイデオロギーの強い影響があると考えられる。このコミュニケーション観を支えているのが Shannon & Weaver (1949) による「情報理論的モデル」である。一方でメディアについては、ジャーナリズムの規範として客観性が重視かつ期待されており、他方で翻訳という実践に関しては、A言語からB言語への等価的な情報伝達と捉えられる傾向にあり、このようなコミュニケーション観が未だ根強いことを示している。

TSUBOI Mutsuko, "Media Translation as an Interaction: Analyzing Documentary Translation Practice," *Interpreting and Translation Studies*, No.10, 2010. pages 141-160. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

情報理論的モデルでは、メッセージは「脱コンテクスト化」された意味の体系であり、コミュニケーション行為に先行して送り手の中に所与に存在するものと想定され、コミュニケーションは単なる意味の伝達として捉えられる(小山 2008, p. 204)。しかし、報道も翻訳も言語使用を伴う、言い換えればコンテクストの中で生起する言語行為である。Baker(2006b)が指摘するように、翻訳という行為は社会・文化的実践に深く組み込まれており、翻訳者や通訳者によって仲介されるやりとりも、社会における全てのやりとりを特徴付ける不均衡な権力関係における動的プロセス、即ちコンテクスト化のプロセスである。このようなコミュニケーション観を支えているのが、シルヴァスティンに代表される現代社会記号論系言語人類学が依って立つ「出来事モデル」である。本研究は、メディア翻訳のひとつの形態としての TV ドキュメンタリー、具体的には 1995 年 BBC 製作による *The Death of Yugoslavia* を ST(Source Text, 起点テキスト)とする NHK ドキュメンタリー番組『ユーゴスラビアの崩壊』を取り上げて、言語行為としての翻訳の実践を言語人類学に依拠し、コンテクストとテキストの間の動的相互作用として考察することを目的とする。それによって現在におけるメディアの表象とそれに関わる相互行為としての翻訳実践を考察し、今後のメディア翻訳の課題を問うものである。

2. メディア研究と翻訳学

メディア研究では、批判的談話分析(Critical Discourse Analysis, 略して CDA)¹の立場から、新聞・ニュース等社会への影響力の強い公的なメディア談話を分析することによって、談話の構造や方略がいかに関社会の権力の生産・再生産に関わっているのかが探究されてきた(e.g. Bell & Garrett, 1998; Fairclough, 1995)。また、海外のメディア研究では、フィクションのみならず、ニュースやドキュメンタリー等ノンフィクションに対しても「物語」論の観点から、ニュースを「物語(ナラティブ)」として考察する研究が成果をあげている(津田 2006, p. 63)²。

メディアは、社会で生起した出来事を編集し、再構成して「物語(ナラティブ)」として視聴者に提示する(高橋 2005, p. 62)。現実で起きる出来事については、その時点においては複数の解釈が可能だが、通常コミュニケーションの参加者は、何らかの解釈の枠組み、あるいはフレーム³によって解釈を限定している。報道においては、ジャーナリストによる現実の解釈と談話の産出という行為があり、国際報道ではそこにもうひとつの解釈と産出行為である言語間の翻訳が常に、そして様々な形で介在する。メディアにおいて、政治、とりわけ紛争や対立は常に報道価値の高い項目であるが、Schäffner & Bassnett(2010)がその序文で指摘するように、政治、メディア、翻訳は互いに深く結びつき、どのような政治的談話の報道とそれに関わる翻訳行為も、通常、出来事を再コンテクスト化したものであり、どのような再コンテクスト化にも変容が伴う。ここでは、情報の取捨選択、追加、省略、再組織化が行われる。しかし、こうした翻訳行為の存在は通常視聴者には見えない。Bielsa(2007, p.151)は以下の点を指摘する。即ちニュース産出およびニュース配信の過程で翻訳が重要な役割を果たす一方で、翻訳行為がジャーナリストの業務に組み込まれ、切り離して認識されていないだけでなく、受け手の読みやすさが優先される結果、翻訳の介在を隠蔽する受容化方略を取ることになり二重の意味で翻訳行為が不可視だという。

翻訳学では、その初期の1950年代から60年代にかけては語やテキストの「等価」が専ら研究対象だったが、70年代に入ると社会・文化的コンテクストへ、さらに80年代後半にはカルチュラル・スタディーズの流れをくむ文化理論の影響を受けイデオロギーや権力関係へとその研究の焦点を移してきた。こうした流れの中で、伝統的な翻訳学でいう「翻訳そのもの (translation proper)」という概念⁴や、安定したSTあるいはTT (Target Text, 目標テキスト) という考えそのものも問い直され、「翻訳の不確定性」という問題が提起されるようになってきている (Munday, 2009; Pym, 2010)。しかしこうした新たな視点からの研究は、未だ文芸翻訳等限られた領域でしか進んでいないのが現状であり、メディア翻訳に関する研究は始まったばかりである。最近の成果としては Baker (2006a)、Bielsa and Bassnett (2009)、Schäffner & Bassnett (2010) 等が挙げられる。またメディア翻訳の中でも本稿で取り上げるドキュメンタリー翻訳は、ほとんど研究が進んでいない。ドキュメンタリーは映像を伴うことから、通常映像翻訳として扱われるが、この分野では圧倒的にフィクション分野への関心が高い。数少ないドキュメンタリー翻訳の研究には Franco (1998) や Espasa (2004) があるが、この分野への関心の低さの背景として両者とも以下の点を指摘する。即ち、翻訳学においても、ドキュメンタリーは「現実」「事実」に関するものであり、従って翻訳も客観的であるはずだと考えられている点である。本研究はメディア翻訳におけるこのような課題に日本というコンテクストで応えようとするひとつの試みである。

3. 分析の枠組み

まず冒頭で触れた「情報理論的モデル」について補足しておきたい。このモデルでは、送手手の情報は特定の解釈コードに従って記号化され、接触回路 (媒体、メディア) を通して受け手に送られ、受け手は送られてきた記号や信号を同一の解釈コードに従って解読する。それによって元の情報の復元がはかられ情報の伝達が完了する。このようなコミュニケーション観は、Pym (op. cit.: 95) の言う翻訳学における「等価」の理論、つまり何らかの形で等価が保証されるという理論や、意味の転移、ST から TT への導管 (conduit) などを想定する理論の基盤となっている。ここではコミュニケーションにおけるメッセージやテキストの生成過程は考慮されない。

これに対し、「出来事モデル」においては、コミュニケーションは文字どおり「出来事」を中心に概念化される。出来事モデルは、哲学者パースによって考案されその後ヤコブソンによって言語学・文学研究に接合された記号論 (semiotics)⁵ をその理論的中核とする社会記号論系言語人類学における中心概念である。出来事モデルにおいては、コミュニケーションは社会的行為・出来事と捉えられ、出来事はオリゴ (相互行為の中心、コミュニケーションにとっての「今・ここ」) を基点とし、マイクロからマクロまで同心円状に広がる社会文化史的な場で生起する「コンテクスト化」と「テキスト化」の相互過程と捉えられる。もともとは偶発的で無限の解釈を秘めた「今・ここ」の行為・出来事の意味、つまりその解釈は、特定のコンテクストを前提的に指し示すことによって、コミュニケーションの参加者にとり解釈可能な出来事となり (テキスト化)、さらに新たなコンテクストを創出すると同時に、以前において前提としたコンテクストを変容させる

(Silverstein, 1993; 小山 2008)。ここではメッセージやテキストは所与のものではなく、コミュニケーションの過程で構築される。

構造主義言語学においては、情報理論的モデルによる脱コンテキスト化された言語、つまり言語による言及指示(何かについて何かを言うこと)の側面が専らの研究対象であった。これに対し、出来事モデルでは、常にコンテキストにおいて生起する言語使用(語用)が分析対象となる。この言語使用には言及指示的機能のみでなく、社会指標的機能という側面があり、前者は「言われていること」「語られていること」を指すのに対し、後者は何かを言うことによって「為されていること」を指す。つまり後者は、言語使用者たちのアイデンティティや権力関係を示す機能である。翻訳が言語行為であるならば、言及指示的意味だけでなく社会指標的意味を翻訳のプロセスにおいて再現することを目指す行為となり(Silverstein, 2003)、従って出来事モデルによる談話分析はこの両者を射程に含むコミュニケーションの分析となる。本稿では、まずSTについてこの2つの面から考察した上で、STとTT間に生じたシフトを手掛かりに、翻訳によりTTにおいて2つの面でいかなる変容が生じているのか、言い換えると翻訳がいかなるコンテキスト化とテキスト化の過程の結果であるのかを分析する。

4. 分析データ

4-1 番組概要

NHK2 ケ国語放送『ユーゴスラビアの崩壊』は、BBC のドキュメンタリー・シリーズ *The Death of Yugoslavia* 全6回各50分(NHK版各48分)の翻訳ドキュメンタリーである⁶。番組は、冷戦終結後世界各地で頻発した地域紛争の中でも、第2次大戦後ヨーロッパで起きた最悪の紛争と言われたボスニア紛争をはじめとする一連の紛争で国家崩壊へと至った多民族国家旧ユーゴスラヴィア連邦(以下、旧ユーゴと略)の解体過程を、紛争当時の様々な映像と紛争当事者の政治リーダーたちを中心に国連、EC(後EU)の代表や西側諸国の政治家たちのインタビューを交えて描いたものである。当時画期的と言われたこの独自の手法と内容で国際的にも高く評価された。旧ユーゴの共通語であったセルビア・クロアチア語⁷を含む数々の言語にも翻訳されている。一方で、1993年に設立された旧ユーゴ国際刑事裁判所(International Criminal Tribunal for the former Yugoslavia、以下ICTY)に検察側の証拠として提出されたが、後述するようにセルビア・クロアチア語から英語への翻訳をめぐり度々物議を醸した。イギリスでは95年9月に第1回目が、日本では翌96年10月にNHK教育テレビで、その後BS1で2009年6月と2010年3月及び9月に再放送された。

STにはセルビア・クロアチア語等旧ユーゴの諸言語のみならずフランス語やスペイン語等も含まれる。NHKによると、日本語への翻訳は全て英語の台本からで、NHK内部のスタッフと外部プロダクションの共同作業ということである。従って、インタビューや当時の映像における発話で英語以外の箇所は、直接これらの言語から翻訳されたものではない。この場合、STはセルビア・クロアチア語なのか、英語なのか。NHKとして行った翻訳という意味ではSTは当然英語になる。しかし、視聴者が放送で聞いているのはセルビア・クロアチア語である。現地語から日本語への翻訳について英語を介している点は、翻訳実践を考察しようとする上で困難な

条件となるが、同時にこれ自体が現在の日本における国際報道の一面を表している。つまり日本では欧米諸国や近隣諸国以外の地域に関する国際報道番組は基本的に英語を介しているという現実である。今回は、実際に放送で話されているテキストを ST として分析する。2010 年 3 月の再放送分を録音し外国語モードと日本語モードで書き起こしを行った。本稿ではこのシリーズの中心テーマであるボスニア紛争勃発前後を扱った第 4 回『地獄の門』を主に対象とする。残念ながら英語台本は、現時点で入手できない。BBC の放送は Google videos 等いくつかのインターネットサイトで閲覧できるが、内容の信頼性と台本そのものではない点を考慮し、考察の際はあくまで参考に留めた。NHK でのボイスオーバー箇所は、BBC 放送では字幕となっており、興味深い差異がある。

4.2 番組の構成要素と TV 記号

ドキュメンタリー番組は、映像、音声、文字など様々なモード、即ちマルチモードで伝えられる。そこで使用される記号は言語記号のみでなく非言語記号もあり、また翻訳も音声記号間だけでなく文字記号との間でも行われる。全シリーズ 6 本の番組は、旧ユーゴに民族主義が台頭し始める 1980 年代後半からアメリカ主導によるボスニア停戦合意が締結される 95 年 11 月まで基本的には時系列的に進行する。番組では、あるまとまったひとつの出来事をめぐって以下の (A)、(B)、(C) の 3 つが繰り返される。

	非言語記号	発話者	言語記号(起点)	言語記号(目標)
A	アーカイブ映像 (VTR) と 音声	ナレーター	英語による発話	日本語による ボイスオーバー
B	アーカイブ映像 (VTR) と 音声	左記出来事の 参加者	主にセルビア・クロアチア 語による発話	日本語による 字幕
C	インタビュー映像 (VTR) *インタビューの姿も通訳者 の姿も見えない	左記出来事の 参加者	主にセルビア・クロアチア 語による発話	日本語による ボイスオーバー

(A) あの時(1992年、一部1990年)・あそこ(ボスニア)の出来事を、今・ここのナレーター(私たち)が視聴者(あなたたち)に語りかける。

(B) あの時(1992年、一部1990年)・あそこ(ボスニア)の出来事の参加者(あの人々・彼/彼女)の発話を今・ここで再現する。(B)がない場合もある。)

(C) あの時(1992年、一部1990年)・あそこ(ボスニア)の出来事について、今(より少し前の)・あそこ(あの人々(彼/彼女))が視聴者(あなたたち)に語りかける。

ナレーターはもちろん、ジャーナリスト自身ではないが BBC あるいは制作担当のジャーナリストの声を代弁する存在である。当然のことながら、BBC での放送と NHK の放送では基点となる「今・ここ」は異なり、同時に「今・ここ」を取り巻く参加者(番組制作者、翻訳者、ナレーター、視聴者等)も異なってくる。本稿では基本的に言語記号を扱うことになるが、上記構成で

映像という記号によって、今・ここに、あの時あそこの出来事が生々しく現実味を帯びて再現されることを常に念頭に置く。

4.3 映像翻訳のモード

映像翻訳のモードは基本的には、吹き替え、字幕、ボイスオーバーの 3 つである。このジャンルでの中心となっている映画では、前者 2 つが主で、ボイスオーバーはドキュメンタリーやニュースで従来から広く用いられている。字幕はその費用効率の点からヨーロッパだけでなく北米・南米、日本や中国を含む全世界に広がっている。問題は、字数の制約のため情報量が 40～75%減ることである。ボイスオーバーは吹き替えのように音声との同期は図られずその分制約が小さくなり費用も掛からない。また、翻訳によって情報量は左右されるが字幕のような制約は低い (Chiaro, 2009)。翻訳学においては、このボイスオーバーの重要性は看過されてきた。Franco (1998: p. 236) が指摘するように、その背景にはボイスオーバーが字幕同様、画面で起点言語の存在が確認できることによって、翻訳は現実の発話そのものだという錯覚を与えることと関係していると考えられる。

4.4 ドキュメンタリーの主な登場人物

以下に、本稿の分析対象とするシリーズ第 4 回に登場する主な人物を挙げる。ナレーター以外は、ボスニア紛争に関わるとされる 3 つの共和国の大統領とボスニア内のセルビア人勢力の代表およびセルビアの民族主義政党の指導者である。

ナレーター	BBC (あるいはジャーナリスト) の声を代表。声のみ。
ミロシェヴィッチ Slobodan MILOŠEVIĆ	当時のセルビア共和国大統領。その後、1997 年から 2000 年まで新ユーゴ連邦大統領。1999 年 ICTY により起訴。2001 年 ICTY に引渡し。2006 年審理中に死亡。
イゼトベゴヴィッチ Alija IZETBEGOVIĆ	当時のボスニア・ヘルツェゴヴィナ共和国大統領。捜査は開始されたが ICTY に起訴される前に 2003 年死亡。
トゥジマン Frajo TUĐMAN	当時のクロアチア共和国大統領。1999 年に病死し、結果的に捜査は開始されず ICTY への起訴を免れた。
シェシェリ Vojslav ŠEŠELJ	当時の超民族主義政党セルビア急進党党首、セルビア民兵指揮官。2003 年 ICTY に引渡し。
カラジッチ Radvan KARADŽIĆ	当時のボスニア・セルビア人勢力代表。1995 年に起訴されるも逃亡。2008 年セルビアで拘束され、ICTY に引渡し。

5. ボスニア紛争と国際報道

1995 年 11 月、アメリカのデイトン空軍基地でボスニア紛争当事国の指導者であるボスニアのイゼトベゴヴィッチ大統領、セルビアのミロシェヴィッチ大統領、クロアチアのトゥジマン大統

領がボスニア和平の協定文書に仮調印し、92年4月に勃発し3年半に及んだボスニア紛争は漸く停戦に漕ぎ着けた。ボスニア紛争は、旧ユーゴ連邦解体と密接に絡み合いながら進行し、解体に伴う一連の紛争の中でもとりわけ凄惨であったことから、その報道は当時世界の注目を集めた。92年には英語で“Ethnic Cleansing”、日本語で「民族浄化」⁸という新たな翻訳語を生み、その夏強制収容所のニュースが流れると一気に現代のナチス・ホロコーストとして盛んにニュースで取り上げられた。「民族浄化」という語は「バルカン」という語とともに、紛争終結から15年経つ今もバルカン半島の非近代性、野蛮性と結び付けられ、語り継がれている。ヨーロッパのオリエントとしてのバルカン像の再生とその他者化の過程(e.g. Todorova, 1997)や紛争自体への欧米メディア報道の関わり(e.g. Kolstø, 2009; Paterson & Preston, 1996)についても多く明らかにされてきている。

旧ユーゴは、第2次世界大戦後から冷戦期まで、第3世界・非同盟諸国のリーダーとして、また多民族国家のひとつの模範例としても国際社会から認められた存在であった。ところが91年6月、連邦を構成する6つの共和国のうち北部経済先進地域であるスロヴェニアとクロアチアが独立を宣言すると大規模な武力紛争に突入した。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ(以下、ボスニアと略)では、ユーゴ解体に伴い独立をめぐる主要3民族のムスリム人(ボスニア総人口の44%)、セルビア人(31%)、クロアチア人(17%)の間で対立が表面化した。92年2月末から3月1日、独立に反対するセルビア人がボイコットする中、ボスニア大統領イゼトベゴヴィッチは独立の是非を問う国民投票を実施し、圧倒的賛成票を得て独立を宣言した。これによって、欧米の民主主義ルールが形式的に満たされた結果、4月にECとアメリカがその独立を承認した。その意思を無視されたセルビア人はボスニア内にボスニア・ヘルツェゴヴィナ・セルビア人共和国を樹立する。一方残る2共和国のセルビアとモンテネグロはユーゴ連邦共和国(新ユーゴ)を結成し、これによって旧ユーゴ連邦は解体した。

ボスニアは典型的な多民族混住地域であり、上記3民族も長い年月共存してきた。3者は共に南スラヴ人に属し、同じ言語を使用していたが、この地が辿った複雑な歴史故に、ムスリム人はイスラム教、セルビア人は東方正教、クロアチア人はカトリックを信仰していたため、紛争が勃発すると国際メディアでは専ら紛争は何世紀にもわたる歴史的な民族間・宗教間対立に起因すると主張され、複雑な現実が単純化されて拡散した。その典型が欧米社会で流布した「セルビア悪玉論」であり、セルビアは「民族浄化」の主体として非難を浴びた。“ethnic cleansing”、「民族浄化」という行為が1992年に突然始まったかの如くの報道が続いたが、この翻訳語のもとになったセルビア・クロアチア語の“etničko čišćenje”は、ユーゴの歴史においては第2次大戦中ナチスの傀儡政府クロアチア独立国の支配集団であったファシスト組織ウスタシャがセルビア人に対して行ったジェノサイドをウスタシャ自らが婉曲に表現したのが始まりであった(佐原 2008, p. 196)。その後、この語は拡大解釈され、80年代後半、セルビア共和国内の自治州コソヴォでのセルビア人とアルバニア人との対立では、アルバニア人によるセルビア人排斥、そしてボスニア紛争が始まると今度は全く逆にセルビア人による他民族排除や残虐行為を意味するようになった(ibid.)。このセルビア悪玉論を支えていた重要な要因として、当時セルビアと密接な関係にあったユーゴ連邦軍をどう解釈するかという問題があった。これ

はボスニア紛争を「内戦」と捉えるか、「侵略戦争」と捉えるかという議論と関わっていた(柴 1996, p. 8)。この紛争を「侵略戦争」と捉える西側諸国やメディアによって、ボスニアのセルビア人勢力を支援しているとされるミロシェヴィッチ政権＝セルビア人＝侵略者という構図が出来上がっていった(ibid. p. 9)。しかし、西側諸国による和平交渉がボスニア紛争当事者による反対で何度も失敗する中、セルビア人勢力に影響力を持つミロシェヴィッチは和平交渉の立役者として大きな役割を担うことになる。

一方、紛争中 93 年 5 月国連安全保証理事会では「ICTY 設立規定」が採択された。ICTY は旧ユーゴ崩壊過程で起った民族同士の虐殺や追放、いわゆる「民族浄化」に緊急に対処するための暫定的な国際刑事裁判所である(多谷 2005, p. 2)。番組制作中の 95 年 7 月には、ボスニアのスレブレニツァで第 2 次大戦後最も大規模と言われるセルビア人勢力によるムスリム人虐殺事件が起きた。この事件で、初めて ICTY はジェノサイドの罪を適用し、それを率いたとされるカラジッチ等指導者を起訴した。シェシェリもボスニアにおける民族浄化を指揮したとして起訴された。ICTY に対しては、当初より大物が政治的配慮から起訴を免れているという批判が大きかった⁹。

6. 談話分析

紙幅の都合上、分析の対象をこのシリーズの焦点であるミロシェヴィッチ大統領を軸とする談話に絞ることとし、まず、6.1 で番組の流れに添っていくつかの事例を抽出する。ST がセルビア・クロアチア語の場合は、[]内に筆者による訳を入れた。ST と TT における下線部は、今回の分析に際し注目した箇所である。同じ番号は相互に対応する箇所を示している。VO はボイスオーバーの略である。続く 6.2 では、ST について(1) 語られたこと(2) 為されたことの 2 つの側面から考察する。その上で、6.3 で ST・TT 間で観察されたシフトを手掛かりに TT の(1)と(2)について考察を行う。

6.1 談話事例

①番組冒頭くどこかの会場。ミロシェヴィッチが英語でカメラに向かって話している。>

ST We are not supporting any military action in Bosnia and Herzegovina.

TT(字幕) ボスニアでの軍事行動を支援してはいない

<部屋のソファに座って英語でミロシェヴィッチがカメラに向かって話している>

ST We are not provoking or supporting hostilities.

TT(字幕) 挑発もしていない

②続いて「1992 年 4 月 ボスニア戦争勃発」と画面表示。<映像と共にナレーターの声>

ST Serbia's president Milošević has repeatedly said ^{②-1}the conflict in Bosnia was a civil war, for which he could not be blamed. But ^{②-2}the men in charge of the murder and ethnic cleansing in Bosnia now describe his role.

TT (VO) セルビア共和国大統領ミロシェヴィッチは、^{②-1} ボスニア戦争に関して自分が非難されるいわれはないと繰り返し主張してきました。しかし、^{②-2} 他のセルビア人指導者たちはこう証言しています。

③続いて<インタビュー映像:インタビューに答えるシェシエリ>

ST ^{③-1}Tada je svaki put direktno Milošević tražio da se upućuju dobrovoljci. Mislim to nas nije trebalo ubeđivati mnogo. [^{③-1} 当時、毎回、直接ミロシェヴィッチが志願兵を送るよう要請していました。 ^{③-2} 私たちにとっては、それに多くの説得は必要なかったと思いますけど。]

TT (VO) ^{③-1} お前の指揮下にある兵士も送ってくれと、ミロシェヴィッチ自身が頼んできたのです。

④続いて<インタビュー映像:インタビューに答えるカラジッチ>

ST Presednik Milošević ^④nije smatrao da je samo priznanje, međunarodno priznanje Bosne i Hercegovine nešto presudno. [ミロシェヴィッチ大統領は、^④承認そのもの、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの国際承認そのものは何か特別なこととは考えていませんでした。]

TT (VO) ミロシェヴィッチは^④ボスニアが世界に承認されたことなどお構いなしでした。

⑤番組のタイトルが表示され、92年3月に至るまでの経緯が(A)、(B)、(C)の形で幾つか繰り返され、<1992年3月とされる首都サラエヴォの映像と共にナレーターの声>

ST ^{⑤-1}For centuries Muslims, Serbs and Croats had lived here together. Now they have to choose a future. Half the Yugoslav republics had gone for independence and ^{⑤-2}it was time for the Bosnians to decide.

TT (VO) ^{⑤-1} 連邦は崩壊し始め、すでにスロヴェニアとクロアチアは独立していました。しかし、ボスニアではイスラム教徒 44%、セルビア人 31%、クロアチア人 17%という民族構成のために、独立をめぐる国論が2分していたのです。

⑥続いて<インタビュー映像:インタビューに答えるカラジッチ>

ST ^{⑥-1}Mismo sami sebe doveli u situaciju u kojoj više nema zajedničkog života. [中略] ^{⑥-2}Tu se jasno videlo da Bosna nemože da opstane. [^{⑥-1} これ以上共存の生活のない状況へと私たち自身が自らを導いたのです。 [中略] ^{⑥-2} そこではボスニアは存続できないことは明らかだったのです。]

TT (VO) ^{⑥-3} ボスニアが運命を選ばなければならない時にきていました。 [中略]

⑦1992年2月末、独立に反対するセルビア人勢力が選挙をボイコットする中、イゼトベゴヴィッチは独立を問う国民投票を強行。首都サラエヴォで危機が高まる。イゼトベゴヴィッチとカラジッチの会

談で一旦危機回避。＜映像と共にナレーターの声＞

ST The Bosnian Serb leader Radovan Karadžić had not really backed down. He knew that his patron Serbian President Slobodan Milošević and President of neighboring Croatia had agreed to carve up Bosnia. ^{⑦-1}Rumors of the Serb Croat deal have long circulated. ^{⑦-2}Now those involved in the talks tell what happened.

TT (VO) しかしボスニアのセルビア人指導者、ラドバン・カラジッチはこれでおとなしく引き下がったわけではありませんでした。彼は自分たちの後ろ盾であるセルビア大統領ミロシェヴィッチがクロアチア大統領トゥジマンとボスニア分割の密約を交わしていたことを知っていました。

⑧続けて＜インタビュー映像：インタビューに答えるトゥジマン＞

ST Rješenje je ono što sam ja predlagao za čitavu Jugoslaviju da se Bosna i Hercegovina organizira kao konfederacija triju naroda. Da bi sva tri naroda bila zadovoljna. ^{⑧-1}Drugo rješenje je da se ide na podjelu. [ひとつの解決策は、私がユーゴスラヴィア全体について提案したもので、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを 3 つの民族の連合として編成するというものです。そうすれば、全ての 3 つの民族は満足するでしょう。 ^{⑧-1}もうひとつの解決策は、分割するというものです。]

TT (VO) ^{⑧-2} 私はミロシェヴィッチにこう言明しました。ボスニアの 3 つの民族がひとつの連邦を作れるならどの民族も幸せだ。 ^{⑧-1} しかしそれが不可能なら、ボスニアは分割されるべきだ。

⑨続けて＜映像と共にナレーターの語り＞

ST ^{⑨-1}Tudman now went for the partition. ^{⑨-2}In his capital he initiated the series of secret meetings between Bosnian Serbs and his clients, Bosnian Croats.

TT (VO) ^{⑨-2} トゥジマン大統領は隣接するボスニアの南西部を勢力下におくことで、クロアチア領内のセルビア人勢力を背後から封じ込めたいと考えていました。彼は、ボスニアのクロアチア勢とカラジッチ率いるセルビア勢を密かにザグレブに招き数回にわたって交渉を行わせました。

⑩クロアチア勢力とセルビア勢力の分割交渉の経緯とそれをミロシェヴィッチに報告するカラジッチについてナレーターの解説が続き、＜インタビュー映像：インタビューに答えるカラジッチ＞

ST ^{⑩-1}Predsednik Milošević nije smatrao da je međunarodno priznanje Bosne i Hercegovine nešto presudno. On je govorio kako je Kaligula proglasio svog konja za senatora ... [中略]. ^{⑩-1} ミロシェヴィッチ大統領は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの国際承認そのものは何か特別なこととは考えていませんでした。彼は言いました。どうやってカリギュラが自分の馬を元老院議員に任命したかを。 [中略]

TT (VO) ミロシェヴィッチはこう言いました。ローマの皇帝カリギュラは、馬を元老議員に任命し

たがその馬が議席につくことはなかった。[中略]

⑪続けて<ナレーターの声>

ST ^{⑩-1}Milošević controlled the Yugoslav Army but he was too clever to use it openly against Bosnia. He adopted a more devious approach.

TT (VO) ^{⑩-1} ボスニアの独立承認を目前にして、ミロシェヴィッチには至急手を打たなければならぬ問題がありました。

⑫ミロシェヴィッチ、ボスニアに配備している連邦軍を引き揚げる。ボスニア出身の兵士が連邦軍から抜け、現地に留まりセルビア人勢力に加わる。セルビア本国から超民族主義集団の民兵が送り込まれる。セルビア国境に近いビエーリナとズヴォルニクが戦闘地になる。<当時の映像と共にナレーターの声>

ST ^{⑩-1}The first place Milošević sent the paramilitaries was the city of Bijelina. ^{⑩-2}The Serbs wanted absolute military control there. It was on the strategic crossroad in Northeast Bosnia.

TT (VO) ^{⑩-1} こうした過激な民兵組織が最初に送り込まれたのはビエーリナ、ボスニア北東部の戦略拠点でした。

⑬<ズヴォルニクに攻め入るセルビア人勢力の映像と共にナレーターの声>

ST But ^{⑩-1}the man knew the federal army tanks had already surrounded his town.
the man は、ズヴォルニクの市長(ムスリム人)を指す(筆者)。

TT (VO) しかしすでに町は^{⑩-1} 連邦軍の戦車に包囲されていました。 ^{⑩-2} 出動を命じたのはセルビア大統領のミロシェヴィッチでした。

⑭<ズヴォルニクでの戦闘、殺害、土地を終われる人々の映像と共にナレーターの声>

ST Some two thousand people were unaccounted for. Nobody knows how many of them were executed on the spot and how many were sent to ^{⑩-1}concentration camps where the murder continued. The rest were expelled. 49,000 Muslims lived in Zvornik. ^{⑩-2}None remained. 5 centuries of Islamic life and culture there were erased. This is ethnic cleansing.

TT (VO) 行方不明者およそ 2000 人。何人がその場で殺害され、何人が^{⑩-1} 強制収容所に連行された揚句命を奪われたのか知る者はいません。生き残ったイスラム系住民は全て町から追い払われます。ズヴォルニクのおよそ4万9千人のイスラム教徒が姿を消そうとしていました。^{⑩-2} 5世紀にわたるイスラム教徒の生活と文化がこの地から抹殺されるのです。これが民族浄化です。

⑮<インタビュー映像:インタビューに答えるシェシェリ>

- ST Ja ne mogu da kažem da ^{⑮-1}toga nigde nije bilo. ^{⑮-2}To je nekada više organizovano ovde u Beogradu. [私は^{⑮-1}それがどこにもなかったということではできません。^{⑮-2}それは、あるときはここベオグラードで大方組織されました。]
- TT (VO) ^{⑮-2}民族浄化の計画は大方ベオグラードでたてられました。

⑯続けてくインタビュー映像:インタビューに英語で答えるミロシェヴィッチ>

- ST There is no one who can believe, ah, what, ah is mentioned as, as organized genocide, even organized from Beograd, even organized by me...It's really out of all consideration.
- TT (VO) 組織化された大虐殺だったのだ、ベオグラードでこの私が計画を企てただの、そんなデマを信じているものはひとりだっていない。全く論外の話だ。

⑰続けてくインタビュー映像:インタビューに答えるシェシエリ>

- ST I ^⑰tada je svaki put direktno Milošević tražio da se upućju dobrovoljci. [それに、^⑰当時、毎回、直接ミロシェヴィッチが志願兵を送るよう要請していました。]
- TT (VO) ^⑰お前の部下も送ってくれと、ミロシェヴィッチ自身が頼んできたのです。

6.2 STの言説分析

ここではSTについて、言語行為の2つの側面、すなわち言及指示機能と社会指標的機能の面から考察する。前者は、言われていること(報道されている出来事)であり、後者は為されていること(報道という語りの出来事)である。後者は「言われていること」を取り巻く「コンテクスト」(社会)の次元であり、どのような社会的なコンテクストにジャーナリストや視聴者が存在し、どのような報道によってどのような社会指標的機能を果たしているのかの次元である。

まず、ここで語られている出来事は、ボスニア紛争勃発の経緯であるが、中心となっているのはミロシェヴィッチ大統領とユーゴ連邦軍のボスニア紛争と民族浄化への直接的関わりについてである。番組冒頭部は、番組のメッセージを要約すると同時に視聴者を番組に惹き付ける上で重要な箇所であり、新聞や雑誌のリードに相当する。ここでミロシェヴィッチが繰り返し、「私たち」はボスニアで軍事的支援はしていないと述べている姿が描かれる。ミロシェヴィッチの指す「私たち」も「私たちが」支援するとされる対象もここでは明瞭にされていない。続いて、セルビア超民族主義集団指導者シェシエリとボスニア内セルビア人勢力指導者のカラジッチへのインタビュー(③と④)で、ミロシェヴィッチ自身の関与を示唆する内容が紹介される。③はその後、詳細な前後の経緯を加えた⑰で、④は⑩で再度同じ映像が繰り返される。ボスニアでは3つの民族間で独立の是非をめぐる対立が深まり、紛争への危機が高まる。他方、セルビアのミロシェヴィッチとクロアチアのトウジマンは、ボスニア政府抜きで領土の分割の交渉を行っていた。トウジマンは3民族による国家連合とセルビア・クロアチアによるボスニア分割を天秤にかけながら後者を選択し、カラジッチと交渉を進める。一方、国際社会によるボスニアの独立承認を見越して、ミロシェヴィッチは連邦軍の再編と撤退の方略をめぐる。セルビアとの国境

に近いボスニア内のいくつかの町では、セルビア人勢力とムスリム人との間で激しい戦闘が繰り広げられ、多くのムスリム人が殺され、家をなくし、土地を追われ、収容所に送られた。これらの戦闘にはシェシェリが自らの私兵を送りこんだ。これが語られた出来事である。

では、この語りによって為されていることは何だろうか。BBC による語りというこの出来事は、ボスニア紛争末期の 95 年秋というコンテキストで生じたものである。5. で述べたように、この頃、和平合意に向けて交渉が続けられており、そこではミロシェヴィッチはトウジマンとともに交渉に大きな役割を果たしていた。しかし、前者は紛争当初より連邦軍を通してボスニアを侵略し、セルビア人勢力による民族浄化に関わっているとして国際社会から非難を受けていた。そこにスレブレニツァの事件が起きたのである。BBC でこの番組制作に当たったジャーナリストは、この番組と併行して出版した著書で、彼らの番組制作の目的はユーゴ崩壊をもたらした重要な出来事を客観的に描くことだとしている (Silber & Little, 1995, p. 25)。しかし、そこでは、ユーゴにおける「戦争 (war)」と崩壊は「社会主義と一党独裁から自由市場の民主主義に平和的に移行することによっては何も得ることのない人々によって計画的、組織的に行われた」と述べ、特にミロシェヴィッチを厳しく非難している (ibid.)。①と②でミロシェヴィッチの言葉を繰り返し、自らを潔白とするその主張を浮かび上がらせ、③と④で民族浄化の罪に問われている 2 人の証言でその主張を覆し、⑤以下でその証言の信憑性を示しミロシェヴィッチの罪を西側の政治指導者や国連、ICTY に向け告発することを意図していることは明らかだろう。つまり、BBC のジャーナリストは、ボスニア紛争がミロシェヴィッチの言う内戦ではなく連邦軍による侵略戦争であり、その侵略戦争にミロシェヴィッチが加担したということを 2 人の証言で明らかにし西側の民主主義の立場から断罪するというイデオロギーを鮮明にしている。さらに、「民族浄化」については、⑭でも明らかのように、セルビア人がムスリム人に対して行う行為として定義されている点、92 年当時「強制収容所」と呼べる証拠はなかった「収容所」を「強制収容所」と規定している点も、92 年以來の西側メディアのフレームで解釈していることを示している。今回は紙幅上取り上げられなかったが、その後、ミロシェヴィッチ同様 ICTY への起訴を検討されることになるイゼトベゴヴィッチについては、その強硬な民族主義には触れられず、専ら 2 つの大きな民族に翻弄される存在として同情的に描かれている点も 92 年以來の構図を再生産するものである。

ここまで、ST について 2 つの機能から分析を試みた。次の 6.3 では ST・TT 間で観察される言及指示面のシフトを手掛かりに TT の社会指標的機能の分析を試みる。

6.3 TT の言説分析

6.3.1 ミロシェヴィッチの主張と BBC の立場

まず、ミロシェヴィッチの主張に関わる箇所から見ていくことにする。②-1 では ST の “civil war” に当たる TT は「戦争」である。これは一見大きな違いに見えない。しかし、6.2 で見たように、“civil war”は BBC の立場を鮮明する上で重要な語彙である。つまりボスニア紛争は主権国家間の「戦争」であり、ユーゴ連邦軍による「侵略戦争」であるという立場である。“civil war”を使用しているのは、これがミロシェヴィッチの従来からの主張だからである。だからこそ、この

主張を覆すための証拠映像や証言が意味をなす。「内戦」か「戦争」かは国際政治・国際法上重要な意味を持つが、TT では既にミロシェヴィッチ自身が「戦争」と認めていることになる。ボスニア戦争勃発」の文字表示にも示されているように、ここでは従来の欧米メディアが依って立つ「戦争」というフレームで最初からこのテキストを解釈していることになる。続く②-2 では、これから行われるインタビューが ICTY で「民族浄化」の罪に問われている 2 人の証言であることを強調することによって、ミロシェヴィッチ自身の主張を覆し、侵略戦争と民族浄化の罪を問うという立場を明確に示すものである。しかし TT では「他のセルビア人指導者」となっており BBC の意図とメッセージは不明瞭となり、社会指標的機能に変化が生じ、再コンテキスト化が起きている。同様のことが⑦-2 でも観察される。このような再コンテキスト化が、翻訳者による解釈の結果であることは明らかではある。同時に考慮しなくてはならないことは翻訳者のボスニア紛争に関する知識や技能面での問題の結果である可能性も排除できない点であろう。

6.3.2 シェシェリとカラジッチの証言

次にミロシェヴィッチの主張を覆すための 2 人の証言③と④について考える。まず③のシェシェリのインタビューでは、ST・TT 間で明らかなシフトが観察される。ST ではミロシェヴィッチがセルビア内で広く志願兵を送るよう要請したと述べるにすぎないのが、TT では「お前の指揮下の兵士を送ってくれ」となっている。英語の台本は実際に放送された BBC の字幕と同じとは言えないが、後者は前者の何らかの前提であると考えられるので、英語の字幕を参照してみると“Milosevic himself asked me to send my fighters”となっている。ここでは BBC 番組製作時におけるセルビア語から英語への翻訳におけるシフトが TT に反映していることが窺える。このシフトによって②で言う証拠性は高くなる。また TT で省略された ST③-2 から窺えるのはシェシェリがミロシェヴィッチと距離をおいていることであるが、TT ではミロシェヴィッチとシェシェリがより近い関係にある印象を受ける。ここでの翻訳は証拠提示のための作為的な解釈とも取れ、それによって言及指示と社会指標両面で変化が生じている。

④のカラジッチへのインタビューでも同様のことが言える。ST では、カラジッチはミロシェヴィッチが「ボスニア・ヘルツェゴヴィナの国際承認そのもの」を重要と考えていなかったと述べる。これは、国際承認を自らの死活に関わると考えているボスニアのセルビア人勢力と全く異なる見解であり、既に両者の間に齟齬が生じていたことが ST から分かる。しかし、TT では「お構いなし」とあるように、国際社会の意向を無視するようなミロシェヴィッチの態度が焦点化されている。英語字幕を参照すると“Milosevic didn't care that the world recognized Bosnia”となっており、ここでも英語の影響が窺える。この箇所は、⑩で再現され、⑩の前後の展開によって、TT で(独立を)「承認された」となっている箇所が実はこの時点でまだ「承認前」であることが明らかになる。独立承認後とすれば、⑪以下で国際社会の決定を無視し連邦軍を利用して巧妙にボスニアに対する戦争を画策していくミロシェヴィッチの姿を描き、彼の主張への反論の前提を提供できる。翻訳に恣意性がなかったとしても、TT は BBC の主張を前提とした解釈の結果である可能性が高い。

6.3.3 ミロシェヴィッチと連邦軍の紛争及び民族浄化への関与

さて、③のシェシェリのインタビューは、⑪以降の流れで⑰で再現される。ミロシェヴィッチが企んだとされる連邦軍の再編により、連邦軍から抜けたボスニア出身による兵士がボスニア内セルビア人勢力に合流する一方で、シェシェリなどのセルビアからの私兵も加わってムスリム人を民族浄化していく過程が⑪から⑭までで描かれる。⑫-1のSTでは「ミロシェヴィッチが民兵を送った」とあるのに対し、TTでは受身形で「民兵組織が最初に送り込まれた」となり、誰が送り込んだのかという行為の主体は隠される。しかしST⑬-1で「連邦軍の戦車が彼の町を包囲した」がTTで「連邦軍の戦車に包囲され」と受身形で表現されたあとSTでは全く言及のない⑬-2「出動を命じたのはセルビア大統領のミロシェヴィッチでした」という文が挿入され、攻撃の主体が明示される。つまりSTではミロシェヴィッチが民兵を送る主体であったこと、そしてその民兵はボスニアに残った元連邦軍ボスニア出身兵士と連邦軍が残した戦車とともにそこにいたことまでしか述べていないが、TTでは連邦軍にミロシェヴィッチが出動を命じたことになっている。ここでは6.3.1で指摘した翻訳者の技量の問題も可能性として考えられるが、いずれにしてもBBCの主張がすでに事実となってTTの解釈の前提となっていると考えてよいであろう。そして⑭の民族浄化についての語りと映像の直後、⑮でシェシェリのインタビューへと続き、ミロシェヴィッチの民族浄化への関与を裏付ける⑰(③の繰り返し)が再現される。ここで注意すべきは、⑮-1と2でSTでは「それが」どこにもなかったということできない、「それはあるときは」ベオグラードで組織されたと言っているに過ぎないのが、TTでは「それ」が「民族浄化」となっている点である。直前の映像から「それ」を指しているのが民族浄化だろうと推測できるに過ぎない。実はシェシェリが民族浄化を指しているのかどうかはここからは分からない。指示代名詞はコンテキストがあってはじめて意味をなすものである。単に「民兵をセルビアから送ること」だったとも十分取れる。英語字幕を参照すると、“I can't deny this took place. Mostly it was organized here in Belgrade”となっており起点のセルビア語に近いテキストとなっている。TTではこれまでのSTの展開と映像を前提としてこの訳語を選びとった可能性が高い。これは⑰(③)の“tada[当時、そのとき]”という語についても言える。

6.3.4 TTにおける社会指標性の変容

ここまで3つのトピックに分けてテキストを時系列に添い考察してきたが、その他、STでは話されていないのに、TTでは話していることになっている⑥-3、⑧-2のような箇所も観察された。前者は⑥-1と⑥-2を削除した代わりにその前の⑤-2でのナレーターの語りの一部がカラジッチの言葉となり、後者では起点となるべきものがないのに言語化されている。⑤や⑨の語りでは、テキスト全体の構成・内容が大幅に変更されている。欧米社会の視聴者と日本の視聴者とではボスニア紛争に関する背景知識も理解度も異なり、その都度補足的な説明も必要となるだろう。しかし、このような変更で反対に漏れてしまう事実も結果として出てくる。例えば⑦-1の分割案のうわさ、⑨-1のトゥジマンによる分割案の選択は重要な箇所である。ここでは取り上げる紙幅はないが⑧-1のようなモダリティのシフトも本来は考察すべき重要な箇所である。

以上、ST・TT間のシフトを手掛かりに考察を試みた。日本の視聴者を念頭にテキストの大

幅な変更が行われている箇所もあったが、そうしたよく目につく部分よりも、語彙の選択や代名詞等結束性に関わる箇所、意味的一貫性を支える箇所に社会指標性に関わる重要なシフトが観察された。「内戦」が「戦争」に、「それ」が「民族浄化」になるなどは、ST を解釈する過程で様々な可能性の中から翻訳者や編集者が選びとったものである。それは日本語への翻訳過程において BBC 英語原文や映像、当時の欧米メディアの主張がすでに事実として前提的に指標され、同時に編集という枠組みで新たに内容が再編成されていった結果であったと概ね言えるだろう。セルビア語等の言語からの翻訳でも様々なシフトが観察されたが、そこには英語の介在による影響も示唆された。上記考察で明らかのように、言及指示面のシフトは社会指標的機能に影響を及ぼす結果となっている。これは逆も言えるだろう。6.2 で見たように、BBC の作品はボスニア紛争がミロシェヴィッチの主張する内戦ではなく、侵略戦争でありそこにミロシェヴィッチが加担したということをも2人の証言を元に明らかにし西側の民主主義の立場から断罪し、ICTY と西側世論に訴えかけるというイデオロギーを示すものである。6.3 で考察した結果としては、2人の証言は起点となるセルビア・クロアチア語を見る限りその説得性は BBC が意図するほど高いとはいえない。英語の訳は証拠とするためのメディアによる恣意的・意図的解釈ともとれる。しかしここでより重要なことは日本語で BBC の「主張」がすでに「所与の事実」として指標され、結果として BBC と同じイデオロギーを共有しながらも新たなテキストを生んでいる点である。同時に ICTY への証拠という意味ではメッセージ性が弱くなっていることは、日本でのこの問題への関与の低さを表していると言えるだろう。もし参照する枠組みが BBC の主張や欧米メディアの主張以外にもあれば、あるいは ST となるセルビア・クロアチア語の翻訳者が翻訳過程に参加できる仕組みがあったとすれば、異なる解釈もあり、異なる番組となっていたかもしれない。

7. おわりに

BBC の番組は ICTY で被告の犯罪の証拠としてミロシェヴィッチの裁判をはじめ検察側によって提出された。しかし判事側からは番組の編集やセルビア・クロアチア語から英語への翻訳について “the tendentious nature” であると指摘される (ICTY IT-02-54 2006 年 2 月 23 日 trail transcript pp. 48680-3) 等問題となった。ICTY では本シリーズ第 1 回での 87 年コソヴォにおけるミロシェヴィッチの次の言葉と映像も証拠として取り上げられた。会場に押し寄せたセルビア人に対しアルバニア人警察が警棒で制止する場面で彼が述べた言葉である。“Nesme niko da vas bije. Nesme niko da dira. [誰もあなた方をたたくことは許されない。誰も触ることは許されない。]” 日本語字幕は「もう二度とあなた方を殴らせない」であり、英語字幕は “You will not be beaten again!” である¹⁰。内外メディアはすぐにこの言葉を取り上げた。国内においてはセルビア人擁護の表明であるとしてセルビアの守護神として祭り上げられ、その後彼はセルビア共産党トップに駆け上っていく。国外では彼の民族主義の出発点として盛んに引用された。この翻訳をどう捉えるべきか。紛争や裁判の行方まで左右しかねないメディア翻訳の影響と役割は今後さらなる研究が必要とされる課題である。本稿では、ドキュメンタリー番組を取り上げ、メディア翻訳が A 言語から B 言語への単なる事実の伝達ではなく、ST が置かれたコン

テキストに翻訳という行為が参与することによってコンテキスト化が引き起こされ、それが新たなテキストとなり(テキスト化され)、次なるコミュニケーションのコンテキストを創出していく動的な過程であることが示唆された。Baker(2006a)は、翻訳と通訳が国際紛争に大きく関わっているとし、紛争の流れや環境を醸成するような言語の存在としてのナラティブに注目し、ナラティブが現実世界を表象するだけでなく現実を構築する故に翻訳が重要な役割を担っていると主張する。それではメディアのナラティブを支える翻訳に今後求められるのは何か。メディア翻訳の役割は何か。少なくともメディアに関わるジャーナリスト、翻訳者そして視聴者がメディア翻訳の相互行為性とその影響・責任を理解することが必要とされており、また日本というコンテキストでは国際報道の英語への依存を問い直し少数言語の翻訳にも目を向けていく必要性が問われていることは確かであろう。

.....

【著者紹介】

坪井睦子(TSUBOI Mutsuko) 明治学院大学非常勤講師。立教大学大学院・異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了、同後期課程在学中。言語人類学、批判的談話分析の視点からメディア翻訳の研究に取り組む。

【註】

1. CDAにおける「批判的」とは、当然のこととして看過されている物事の価値や意味を問い直し、そこに潜む問題を捉えなおすという意味である。CDAは「談話を歴史や力関係が内包された社会的実践 social practice」であると捉え、談話を通して社会的な権力支配が再生産される諸相を分析する(高橋 2005, p.63)。
2. 物語論からのニュース研究は日本ではあまり進んでいない。その背景には、「客観報道」を規範とする日本のジャーナリズム界から報道を「物語」として分析する視点に対する批判・反発があるという(津田 2006, p. 63)。
3. フレームとは我々が日常生活の中で遭遇する出来事や相互行為の枠組みである。フレームが生起することによってそれ自体は意味のない出来事を、意味のあるものとして捉えることができ、相互行為の参与者として適切な行為を行うことができる。つまり、フレームによって「経験が組織化される」(Goffman, 1974, pp. 10-11, p.21)のである。フレームは言語人類学における重要な概念のひとつである。
4. Jakobson(1959/2004)による翻訳に関する3つの分類のひとつである「言語間翻訳」を指す。あと2つは「言語内翻訳」、「記号間翻訳」である。
5. パースの記号論では、全てのものや事象を記号作用(記号過程)として捉える。記号論的な世界においては、その中心に「指す」・「指される」(指示作用)という歴史的、社会的、文化的なコンテキストで生起する出来事があり、この指示作用によって全てのものや事象は存在する。全ての記号は、ひとつ以上の記号作用に参与している。
6. 各タイトルは以下のとおりである(括弧内はBBCのタイトル)。第1回『民族主義の台頭』(Enter

Nationalism)、第2回『戦争への道』(*The Road to War*)、第3回『独立戦争』(*Wars of Independence*)、第4回『地獄の門』(*The Gates of Hell*)、第5回『安全地帯』(*A Safe Area*)、第6回『アメリカによる和平』(*Pax Americana*)

7. ユーゴ解体過程で、まずセルビア語とクロアチア語に分裂。多民族国家ユーゴでも典型的な民族混住地域のボスニアでは、主要3民族のムスリム人(旧ユーゴでは民族概念のひとつ)、セルビア人、クロアチア人は皆ボスニア人(Bosanić ボサナッツ)と呼ばれ、基本的には、セルビア・クロアチア語のボスニア方言を使用していた。ボスニア紛争の過程で、ボスニア政府は独立した民族国家に不可欠となる民族語を追究する中で、1993年民族名をムスリム人から「ボスニア人(Bošnjak ボシュニャク)」と変更し、民族語名を「ボスニア語(bosanski jezik)」と決定した(齋藤 2004)。その結果、セルビア・クロアチア語は3つの言語に分裂することになった。
8. この語は、1992年夏ごろに日本のメディアに登場し、急速に普及した。“ethnic cleansing”からの翻訳語であるが、“ethnic cleansing”という英語自体、独立間もないボスニア政府から要請を受けたアメリカの大手PR会社により反セルビアキャンペーンとしてセルビア・クロアチア語の“etničko čišćenje”から翻訳されたものである(高木 2005)。坪井(2009)も参照。
9. ミロシェヴィッチが起訴されたのはコソヴォ紛争の後であり、トウジマンとイゼトベゴヴィッチについては2人も起訴前に死亡してしまった(多谷 2005, p. 186)。
10. ミロシェヴィッチは裁判において“again”の意図的挿入を始め英語の字幕が正しくないとして抗議を行っている(ICTY IT-02-54 2005年2月9日 trail transcript, pp. 35946-7)。

【引用文献】

- Baker, M. (2006a). *Translation and conflict: A narrative account*. New York: Routledge.
- Baker, M. (2006b). Contextualization in translator- and interpreter-mediated events. *Journal of Pragmatics*, 38, 321-337.
- Bell, A., & Garrett, P. (Eds.). (1998). *Approaches to media discourse*. Malden, MA: Blackwell.
- Bielsa, E. (2007). Translation in global news agencies. *Target*, 19(1), 135-155.
- Bielsa, E., & Bassnett, S. (2009). *Translation in global news*. London: Routledge.
- Chiaro, D. (2009). Issues in audiovisual translation. In J. Munday (Ed.), *The Routledge companion to translation studies* (pp. 141-165). London: Routledge.
- Espasa, E. (2004). Myths about documentary translation, In P. Orero (Ed.), *Topics in audiovisual translation* (pp.183-197). Amsterdam: John Benjamins.
- Fairclough, N. (1995). *Media discourse*. London: Arnold.
- Franco, E. P. C. (1998). Documentary film translation: A specific practice? In A. Chesterman, N. G. S. Salvador, & Y. Gambier (Eds.), *Translation in context: Selected contributions from the EST congress, Granada 1998* (pp. 233-242). Amsterdam: John Benjamins.
- Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Boston: Northeastern University Press.
- Jakobson, R. (1959/2004). On linguistic aspects of translation. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies*

- reader* (2nd ed.) (pp. 138-143). New York: Routledge.
- Kolstø, P. (Ed.). (2009). *Media discourse and the Yugoslav conflicts: Representation of self and other*. Burlington, VT: Ashgate.
- Munday, J. (2008). *Introducing translation studies: Theories and applications* (2nd ed.). London: Routledge.
- Paterson, J. G. R., & Preston, A. (Eds.). (1996). *Bosnia by television*. London: British Film Institute.
- Pym, A. (2010). *Exploring translation theories*. New York: Routledge.
- Schäffner, C., & Bassnett, S. (Eds.). (2010). *Political discourse, media and translation*. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- Shannon, C., & Weaver, W. (1949). *The mathematical theory of communication*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- Silber, L., & Little A. (1995). *The death of Yugoslavia*. London: BBC Books.
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic discourse and metapragmatic function. In A. Lucy (Ed.), *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics* (pp. 33-58). New York: Cambridge University Press.
- Silverstein, M. (2003). Translation, transduction, transformation: Skating “Glossando” on thin semiotic ice. In P. G. Rubel, & A. Rosman, (Eds.), *Translating cultures: Perspectives on translation and anthropology* (pp. 75-105). New York: Berg.
- Todorova, M. (1997). *Imagining the Balkans*. Oxford: Oxford University Press.
- 小山亘 (2008) 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社
- 佐原徹哉 (2008) 『ボスニア内戦: グローバリゼーションとカオスの民族化』有志舎
- 齋藤厚 (2004) 「旧ユーゴスラヴィア、セルビア・クロアチア語の分裂におけるヨーロッパの対応」『ことばと社会』編集委員会 (編) 『ことばと社会別冊 1 ヨーロッパの多言語主義はどこまで来たか』(pp. 109-120) 三元社
- 柴宜弘 (1996) 「ボスニア内戦と国際社会の対応 — ユーゴスラヴィア解体から和平協定調印まで」『国際問題』第 434 号: 2-14.
- 高木徹 (2005) 『ドキュメント戦争広告代理店: 情報操作とボスニア戦争』講談社
- 高橋圭子 (2005) 『「クローズアップ現代」のく物語>: メディアの批判的分析』三宅和子・岡本能里子・佐藤彰 (編) 『メディアとことば 2: [特集] 組み込まれるオーディエンス』(62-99 頁) ひつじ書房
- 多谷千香子 (2005) 『「民族浄化」を裁く—旧ユーゴ戦犯法廷の現場から—』岩波書店
- 坪井睦子 (2009) 「翻訳、テキスト、コンテキスト: ボスニア紛争とそのメディア表象」『異文化コミュニケーション論集』第 7 号: 83-99.
- 津田正太郎 (2006) 「ニュースの物語とジャーナリズム」大石裕 (編) 『ジャーナリズムと権力』(pp. 62-80) 世界思想社
- (BBC)_The_Death_Of_Yugoslavia_(1of6)_Enter_Nationalism.avi
 [Online] <http://video.google.com/videoplay?docid=6312864596613878002#> (2010 年 7 月 31 日)
- (BBC)_The_Death_Of_Yugoslavia_(4of6)_The_Gates_Of_Hell.avi
 [Online] <http://video.google.com/videoplay?docid=4514362953029267142#> (2010 年 7 月 31 日)
- IT-02-54 trail transcripts [Online] United Nations International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia

公式サイト <http://www.icty.org/> (2010年7月31日)